令和6年度小松市立第一小学校　学校評価　１（年度末）

めざす児童生徒像

○　思いや考えを持ち、伝えることのできる子
○　友だちのよさを見つけることのできる子
○　互いに高め合うことのできる子

※児童生徒結果－教員結果・保護者結果

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		中間 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	年度末 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
学校重点項目（学校で設定）	自己肯定感の向上	自己肯定感	①②において９０％以上	①	教師は、児童のよさを認め、引き出す声掛けをしている。	100P (57+43)	92P (63+29)	76P (44+32)		100P (67+33)	93P (50+33)	94P (69+25)		①②については、どちらも９０％をこえる結果となった。級外も含めた教師全体の意識した声かけが、児童及び保護者の実感につながったものと思われる。	児童の中には、自らのよさを実感できないままでいる子が１０％弱いる。そんな子どもたちには、自己肯定感を高めていくことが大切であり、クラスの中で自己存在感を実感できるような取組を進める必要がある。
				②	教師と児童とが互いに信頼し温かい関係ができている。	100P (43+57)				100P (50+50)					
				③	キャリアパスポートを活用し、学びや成長を実感できるようにする。	41P (10+31)				30P (4+26)					
				集計											

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目										達成状況の分析	改善策
石川県共通重点項目	業務の改善 働き方や	働き方改革	①②において９０％以上	①	80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	68P (34+34)				67P (34+33)				時間外勤務の削減がなかなか進められなかったが、ICTを有効活用し、効率的に業務を進めることはできた。	ペーパーレスも意識しつつ、デジタルとアナログのよさを生かし、うまく使い分けながら業務を進めることで、効率的な業務へとつなげていきたい。
				②	学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	97P (20+77)				93P (33+60)					
				③	効率的な業務の進め方を工夫している。	86P (29+57)				87P (47+40)					

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	①②③において90%以上	①	研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元（授業）構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	100P (62+38)				87P (47+40)				①②③について，目標指標を達成した。①については，年度末は90Pにわずかに届かなかったが，１年間を通して学年部会を中心に熱心に授業づくりを進めてこれた。整理会でも学年の枠をこえて，活発に意見交流することができた。	事前研，事後研への参加を任意にしたため，研究授業前の授業研究が学年中心となり，他学年からの意見が反映されにくかった。さらに教材研究を深めていくために，研究通信や掲示などを活用して，学年での話し合いを全体にもっと広げたうえで意見を取り入れていきたい。
				②	授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100P (61+39)				100P (67+33)					
				③	児童のつまずきを予想し、そのための手立てを考えた授業実践に取り組んでいる。	100P (48+52)				97P (67+30)					
				集計											
		「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	①②⑦において児童教師共に８５％以上	①	児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	88P (16+72)	92P (49+42)			100P (21+79)	89P (45+44)			①②⑦のいずれの項目についても，教師児童共に目標指標を達成した。教師の肯定的回答がいずれも向上しており，２学期以降「みんなでつくる授業」を意識した授業づくりができたと言える。児童の回答も目標指数を達成しており，落ち着いて学習に向かうことができているといえる。項目④⑤の２項目について，教師児童共に肯定的回答が減少している。全体で目指す姿を共有して取り組んできたことで，より高次な姿を求めていると考えらる。項目⑥について，教師の肯定的回答が増加しており，ICT機器を効果的に使うという意識が教員全体に浸透してきていると考えられる。	今年度は年間を通して学校全体や学級で目指す授業像を掲示し，全校で共有してきた。教師はもちろん，児童の中でも他学級にも目を向けたり，学校としての目指す授業を意識したりすることができていたと考えられる。来年度に向けて，より学校全体で共有できるように，さらに取り組みの見える化を進めていきたい。
				②	児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。	78P (13+66)	89P (53+36)			82P (25+47)	90P (48+42)				
				③	児童生徒は、自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組み立てなどを工夫して発表している。	69P (13+56)	87P (51+36)			80P (14+66)	83P 44+39)				
				④	児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えている。	81P (6+75)	90P (58+32)			79P (14+65)	89P 53+36)				
				⑤	児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり，学びに対する達成感を得られたりしている。	91P (9+81)	91P (57+34)			79P (21+58)	87P 53+34)				
				⑥	児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	55P (19+35)	94P (66+28)			79P (33+46)	95P (77+18)				
				⑦	児童は、図や式、言葉を関連付けて説明したり、問題解決したりしている。	80P (13+67)	88P (57+31)			96P (19+77)	86P (53+33)				
				集計											
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	②③ において９０％以上	①	指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	94P 33+61)				93P (34+59)				②③において、目標数値の90%を超えることができた。一方で、よくできたと回答した数値が減少している。前期と同じような取組をしているためだと考えられる。 ④の数値が上昇した。小中で連携していることを周知してきたことが要因だと考えられる。	PDCAサイクルを意識せずに日常的に行えていることはよいことだと感じる。一方で、共通実践のふり返りをしっかりとして、次の活動につなげている意識が高まるような取組方に改善していく必要がある。
				②	児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立している。	94P (44+50)				100P (33+67)					
				③	全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	94P (40+54)				97P (30+67)					
				④	校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。（小中連携）	50P (12+38)				62P (14+48)					
				集計											
		家庭学習	①において９０％以上	①	家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	76P (29+47)	84P 46+38)			83P (28+55)	97P (44+35)			①②の数値が向上している。児童評価では、目標数値を超えることができた。児童が取り組む家庭学習の指導が統一されてきたと考えられる。	家庭学習の取り組み方を学校で統一して、家庭学習週間などで全校で確認するなど、さらに学校としてどのクラスも同じ取り組みを進めていきたい。
				②	学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	79P (24+55)	88P (63+24)			85P (37+48)	92P (72+20)				
				集計											

令和６年度小松市立第一小学校　学校評価２

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・８月提出）	取組の成果と課題（年度末・３月提出）
生徒指導	積極的な生徒指導による主体性の育成 ・生徒指導の４つの視点（自己決定・自己存在感・共感的な人間関係・安全・安心な風土の醸成）を生かした学年・学級経営や授業づくりに努める。 ・児童が主体的に企画運営した取組を昨年度よりも増やす。 ・全教職員が、子どもに寄り添い温かい声かけをする。	・共通した指導ができるような丁寧な提案を意識したことや、児童の実態を加味した目標を学年団で学期ごとに設けていることで、学校として児童に向き合っていく姿勢を共通理解することができている。また、研修会等を利用して、生徒指導の４つの視点を生かした授業や学級経営の仕方に関する学びを深めてきた。 ・高学年を中心として、「児童の主体性」という意識を持って指導にあたっている。各学年での実行委員の活動や委員会活動など、活発な行動がとれている。 ・児童アンケートにおける「先生は、あなたのいい所を認めてくれますか。」や「あなたはクラスの仕事や委員会の仕事に自ら考えて取り組んでいますか。」の質問に対しAB群が90％以上と高水準である。CD群にきちんと目を向け、アンケート面談等を利用しながら、その背景を把握していけるように努める。	・教員アンケートにおいて100％の肯定的回答を得られたことから、全員が共通の意識の下で指導支援にあたれたのではないかと考える。今後も研究と修養に励み、児童アンケートの「自分には、よい所があると思いますか」の回答（AB群）をもう少し上昇させたい。 ・各学年において、それぞれの活動で実行委員会を設け、児童を主体とした活発な取り組みを行った。5・6年生においては、委員会、クラブ、縦割り活動、児童集会などで各々が主となって動けるような機会を設けている。 ・児童アンケートにおける「学校は楽しいですか。」「先生は、あなたのいい所を認めてくれますか。」「あなたはクラスの仕事や委員会の仕事に自ら考えて取り組んでいますか。」の回答においてAB群を90％以上で維持することができた。CD群にもきちんと目を向け、アンケート面談等を利用しながら、その背景を把握していけるようにも努めた。
特別支援教育	一人一人のよさを認め、引き出すための特別支援教育の充実 ・支援や配慮が必要な児童について担任やコーディネーターを中心に適切に実態把握し、その子に応じた支援の実現を目指す。 ・生徒指導と協力し、児童理解を深め、児童理解の会にて適切な支援について全職員で共有し、組織的な校内支援体制を強化する。（年間計画に沿って適切に会を運営していく）	担任やコーディネーターを中心に組織的に動くことができた。児童理解の会を職員会議後行い教員間で支援や配慮が必要な児童についての共通理解ができていると考えられる。支援員の配置についても、児童や学級の実態に応じて学期の途中で見直すことができたのはよかった。教員アンケートにおいても、特別支援教育に関する質問で肯定的な回答が100％と97％と高かった。今後も継続していきたい。夏休みに支援や配慮が必要な児童についての具体的な目標や学校全体でサポートしていくための体制づくりを明確にすることができたので、そのことを踏まえてより組織的に動けるようにしていきたい。	・教員アンケートにおいて、特別支援教育に関する項目では、肯定的な回答が「学校がその子に応じた支援を実現しようとしている。」が89％と「学校は、児童理解の会にて適切な支援について全職員で共有している。」が86％で中間評価より下回った。児童理解の会で効果的な対応策について共有できるよう、会の企画・運営を再度見直し、担任（困り感のある教員）が求めていることへの支援やアイデアが出せるような会にしていく必要がある。
保健健康教育	望ましい生活習慣の確立 ・発育測定時に、学年に応じた保健指導を行う。 ・児童が自らの生活習慣を見直すことができるよう、長期休みを利用して健康チェックを行う。 ・メディアと適切な関わり方ができるよう判断力を養い、望ましい生活習慣につなげるため、学年に応じた指導の機会を設ける。	・発育測定での保健指導は9月以降実施予定のため、各学年と話し合いながら指導内容を決めていく。 ・メディアとの関わり方において、全教師が指導の機会を設けていると回答している。「メディアの約束を守れている」について肯定的な回答は児童が８５％、保護者が７０％となっている。家庭での取り組み内容が充実するように、指導を続けていきたい。	・発育測定時には、時期や学年に合わせて指導を行った。担任とも打ち合わせをすることで、クラスのニーズに合った指導ができたのではないかと思う。 ・メディアとのかかわり方において、約３割の職員が指導の機会をあまり設けられなかったと回答している。メディアについては長期休業前等に限られていることも考えられる。メディア関連の資料をどの機会にどのように活用し、児童に指導していくか、より具体的な計画を立てる必要がある。
道徳・人権教育	心を育む道徳教育 ・道徳教育及び道徳科の指導方法や評価の在り方についての道徳通信を必要に応じて発行する。 ・外部講師を招聘するなど、校内研修を開催し、道徳の授業改善をめざす。	・教員アンケート「道徳教育及び道徳科の指導方法や評価の在り方について道徳通信を発行したり研修を行ったりする」の項目について、肯定的な回答が７１％であった。2学期に校内研修を実施し、本校の道徳教育で大切にしたいことを確認したい。それを踏まえ、模範となる指導案を作成し、道徳教育の充実に努めたい。 ・本校の道徳教育重点目標の観点について実践したことを道徳通信として発行していきたい。	・教員アンケートの「道徳教育及び道徳科の指導方法や評価の在り方について道徳通信を発行したり研修を行ったりする」の結果で、肯定的な回答が若干増加している。指導主事を招いて、道徳科の授業について講義を聞き、担当する学年の指導案を作成し、２学期の指導にいかすことができた。 ・道徳教育の充実のために、道徳通信を出したり、学級通信に道徳の授業での取り組みや児童の反応を載せたりして、保護者にも本校の道徳の取り組みを発信することができた。来年度も、道徳教育の大切さを教職員と確認し、充実した取り組みが行えるように、計画実行する必要がある。
体力向上	体力・運動能力の向上 １校１プランの取り組みを推進し、体力・運動能力の向上を図る。 ・多くの児童に「できた！」という経験を積ませ、仲間と共に運動に取り組む楽しさを味わわせる。 ・体力テストの結果に基づき、弱点を補強するための運動を授業に取り入れ、体力の向上を目指す。	・教師の取り組みの意識は、肯定的な回答が100%であったのに対し、児童、保護者のアンケートで「体を動かすのが好き」と答えた割合は90％である。教師の取り組み方が、児童の意識に少しでも反映していけるよう、継続して取り組んでいきたい。 ・今年度の体力テストの結果も踏まえ、２学期以降全学級で取り組みを行っていきたい。	・児童に「できた！」という経験を積ませ、仲間と共に運動に取り組む楽しさを味わわせようと、意識して取り組んでいる教師の割合は96%で、高い水準を継続できている。 ・今年度も体力テストの結果に基づき、股関節の運動に重点的に取り組んでもらうよう呼びかけはしたが、今一つ徹底はできていなかった。ただ、体育の授業者が場の工夫をする姿がたくさん見られ、授業改善に努めている様子は見られ、弱点の補強ばかりに偏らず、授業改善も並行して取り組んでいくやり方も有益であると感じている。
情報教育	GIGAスクール構想の充実 ・より日常的にICTが使用できるよう環境の充実を図り、日々学習用端末を活用した授業に取り組む。 ・校内研修の機会を定期的に設定し、教職員の情報活用指導能力の向上を図る。	・教員アンケート「学校として、校内研修の機会を定期的に設定し、教職員の情報活用指導能力の向上を図っている。」の項目について、肯定的な回答が97％であったのに対し、「あなたは、日常的にICT機器を活用した授業に取り組んでいる。」の項目については、肯定的な回答が76％であった。研修の内容を吟味し、教職員が今まで以上にICTを活用できるようにしていきたい。 ・ICTを活用しやすいような環境の整備を２学期以降も行っていきたい。	・教員アンケート「あなたは、日常的にICT機器を活用した授業に取り組んでいる。」の項目については、肯定的な回答が中間76％、最終75％と、活用頻度は大きく高まったとは言えない。教員アンケート「学校として、より日常的にICTが活用できるよう環境の充実に取り組んでいる。」の項目について、肯定的な回答が中間82％、最終83％とほとんど変わらなかったことからも、教員の思いを把握する機会をとり、今まで以上に環境の充実に取り組んでいく必要がある。GIGAタイムの運営方法を工夫し、日常的な活用が当たり前となるよう方策を考えていきたい。
家庭・地域社会との連携	社会に開かれた教育課程の実現 ・地域人材とのつながりを広げ、地域のよさに着目したカリキュラム作りを行う。 ・生活科や総合的な学習の時間、特別活動において、探究的な学習を意識し、学びの充実を図る。	・町内会長に協力を仰ぎ、今年度新しく社会見学に協力いただける農家とつながることが出来た。 ・地域（町内会）と連携して通学路の安全について点検し、より安全な通学路となるよう呼びかけ看板等の設置を行うことができた。 ・2学期からは、地域教材の良さを生かして、より探究的な学習の充実を進めていく。	・学年ごとの学習内容に応じて、校区にフォーカスした学習テーマを掲げたり、校区内に校外学習に出かけたりして、校区と関わりを持ちながら学習することができた。 ・3年生や5年生では身近な地域や生活を元に探究学習を進めることができた。 ・まだまだ、学習に有益な地域人材が多く存在する校区であり、今後も地域町内会と情報交換を密にし、人材の発掘を進めていきたい。
人材育成	効果的な人材育成のための場の設定と工夫 ・各ステージに応じたタイムリーな研修、および学校課題に応じた研修のあり方の工夫を行う。 ・学年部会や分掌部会を充実させ、日常的にメンター制が行われるようにする。	・日常的にベテランが若手に対し、指導や助言をする機会がよく見られている。 ・各種研修も、ニーズや時期に見合った内容のもと実施されている。 ・今年度は、主任会議と同時間帯に若プロの時間を設定したことで、定期的に若手育成のための研修の場を設けることができている。	・学年部会や分掌部会の場で、活発に意見交換がなされている。それぞれのよさを生かした活動ができている。 ・若プロについては、参加者中心に研修が進められていたため、テーマや研修内容が偏っていた。来年度は管理職、若プロコーディネーターと連絡調整をしながら、若プロの趣旨をふまえた研修を行い、若手の資質向上に努めていきたい。

学校関係者評価	【中間評価】 ・通学路の安全点検の取組がすばらしい。各町の協力体制がすばらしい。 ・人材発掘と言っても簡単な話ではないと思われるが、町内会長と連携しながら人材を探そうとする努力はすばらしい。 ・習熟度別の指導は、進んでいる子どもにも少し苦手な子どもにもメリットがあり、効果がある。授業を見ていても子どもたちが生き生きしていた。 ・3年生の子どもたちがタブレットを使って意見交流をしていた。新しい教育のスタイルが浸透してきているのを実感した。 ・元日の地震の際、孫が家の机の下に潜る様子があり、学校での訓練の賜物だと感じた。しっかりと指導されていて感謝している。 【最終評価】 ・学習用端末をよく持ち帰り、家庭学習でも使っている。授業でも使っている様子が見られたが、メリットデメリットを見極めて効果的に使っていってほしい。 ・地域人材の発掘が進められていてよかった。地域（各町内）のことをもっと知るという意味でも、町内会長さんの話を聴くのも地域理解に役立つと思うので、今後検討してみてはどうか。 ・子どもたちの安全のためにも、地域や保護者が積極的に除雪作業に取り組めるといいのではないか。ＰＴＡもその働きの一役を担っていくとよいと感じる。 ・インフルエンザで休んだ時など、コドモンで宿題等のお知らせが届き、大変便利である。